

民国期から人民共和国期にかけての 翻訳ストラテジーの変遷

—「蜘蛛の糸」の八つの中国語訳を例にして—

王 唯 斯

Translation Strategies Transition from Republic to People's Republic:

A Case of Eight Chinese Translation Versions for *The Spider's Thread*

WANG, Weisi

在翻译学的发展过程中，由以色列学者Even-Zohar于1970年代提出的多元系统理论（Polysystem theory）使翻译研究融入了社会与历史层面的背景，突破了以往仅针对原文和译文进行的经验性比对。

借用多元理论来观照中国的翻译文学可以发现：从1910年代后半到1930年代，是现代汉语初步形成的一个时期。由于当时需要发展新文学以及新的语言规范尚未确立，不少先驱者提倡借助翻译，尤其是通过翻译模仿外国文学来建立和发展中国的新文学和白话文。而1949年之后，现代汉语已经有了几十年的发展，加之从1950年代开始国家大力推广普通话，努力实现汉语规范化，使得现代汉语的语言规范逐步得以建立，翻译策略也呈现出了不同的趋势。

本文将基于多元系统理论，围绕两个时期所译的8个《蜘蛛之丝》中译本，通过具体的译例分析，考察社会背景相异的两个时期在翻译策略方面有何不同。

关键词：蜘蛛之丝，多元系统理论，翻译策略，Even-Zohar

1. はじめに

翻訳文学というジャンルにおいて、同じ起点言語¹に対し、新たな翻訳作品が出版されることが多くある。その原因については、目標言語²の文章表現法や文法に変化が生じることで、時代に合わせた新訳が必要となることもあれば、目標言語における翻訳ストラテジー (translation strategies)³による変化も一因と指摘できるだろう。ゆえに、通時的に複数の訳本が存在する翻訳文学は、目標言語の翻訳ストラテジーの変遷を考察する好材料だと思われる。

大正7年(1918)鈴木三重吉が主宰する『赤い鳥』の創刊号に掲載された「蜘蛛の糸」は、調査の及ぶ限りでは、民国期において1927年から1929年にかけて、4回翻訳された。この時期において翻訳回数之最も多い芥川作品の一つと言える⁴。また、1980年代以降⁵、中国における芥川文学の選集にもほとんど、「蜘蛛の糸」が収められている。なぜ「蜘蛛の糸」が、こんなに多く翻訳されたのか、翻訳者によるまえがき、あとがきなどの説明の類がないため、翻訳動機をはっきり特定できないが、この作品の主題が勧善懲悪、悪因悪果という永遠のテーマと仏教の題材であって、中国人翻訳者と読者にとっても、なじみやすいため比較的翻訳しやすかったものと推測できる。

周知のように、1920年代は、白話文と白話文学が創出された時期であ

1 翻訳における起点言語 (source language) は、翻訳する前の原文の言語を指す。

2 翻訳における目標言語 (target language) は、翻訳した後の訳文の言語を指す。

3 translation strategies とは、翻訳に取り組む姿勢や考え方のこと。たとえば、同化 (domestication) と異化 (foreignization) があげられる。また、この用語については、翻訳方略、翻訳戦略、翻訳ストラテジーなど複数の訳語がある。本稿では、翻訳ストラテジーを採る。

4 調査の及ぶ範囲では、民国期において、もう一つ翻訳回数之最も多い芥川作品は、「南京の基督」である。

5 1949年から1979年にわたり、社会背景による種々の原因のため、中国では芥川文学に対する新規翻訳は1作も世に出ない一時期である。改革開放後の1980年代から、現在まで芥川文学に対する翻訳が継続して行われている。

る。一方、1980年代以降は、現代中国語がすでに一応の定式が形成された時期である。両時期の翻訳ストラテジーの変遷について、本稿では中華民国⁶と中華人民共和国の両時期の異なる社会背景のもとで成立した翻訳を取り上げ、Even-Zohar⁷の多元システム理論を援用することによって、芥川龍之介「蜘蛛の糸」の八つの中国語訳を比較分析し、通時的に考察しようとするものである。

2. 理論的枠組み

両時期の翻訳作品を考察する前に、援用する翻訳論を簡単にまとめておきたい。翻訳そのものの歴史は長いが、翻訳研究が独立した学問分野として確立したのは、1970年代以降のことである。そして、イスラエルの研究者Even-Zoharの多元システム理論が発表されて以後、翻訳研究の範囲が個々のテクストレベルから社会的コンテクスト⁸にまで拡大する転機を迎えることになる。

考察に用いた多元システム理論を概略的にまとめると、この理論は、翻訳文学を孤立したものではなく、ほかの文学作品とともに、より大きな文学的多元システムの中の一つのシステムとして捉えている。文学的多元システムでは、主要な位置（primary position）にある文学と従属的な位置（secondary position）にある文学があると見なす。しかも、こうした関係性は固定的ではなく、絶えず「流動」している。翻訳文学は、一般的に従属的な位置を占めるが、主要な位置を占める場合もある。文学的多元システムに占める翻訳文学の地位が、翻訳ストラテジーを左

⁶ 本論文の民国期とは、1912年1月1日に成立し、1949年10月1日に中華人民共和国が建国されるまでの中華民国の期間を指す。

⁷ Itamar Even-Zohar (1939-) イスラエルのテルアビブ大学教授。

⁸ 社会に属する人々や文化、思想、歴史、経済などの要素を含む状況を指す。鳥飼玖美子編著『よくわかる通訳翻訳学』（ミネルヴァ書房、2013）128頁を参照。

右するとEven-Zoharは考える。つまり、翻訳文学が多元システムの中で従属的な位置にある時には、翻訳者は、目標言語における既存の規範やモデルに従い、同化的翻訳方法を採用することが多い。一方、翻訳文学が多元システムの中で主要な位置を占める場合、翻訳者は起点言語を訳出する際、目標言語における既存の規範やモデルを求めるとはならず、異化的翻訳方法を取り、起点言語に極めて近い翻訳テキストを生み出すとされる。Even-Zoharは以下の通り、翻訳文学が主要な位置を占める三つの代表的なケースを挙げる。

- (1) 「若い」文学が確立されようとしていて、はじめは「古い」文学にできあいのモデルを求めるとき。
- (2) 文学が「周辺の」であるか「弱く」、欠けている文学タイプを輸入するとき。
- (3) 文学史の重要な転換期にあつて、既存のモデルがもはや十分とはみなされない場合、あるいは一国の文学の真空状態にあるとき。⁹

たとえば、日本の明治時代は、近代化が図られ、「国語」が創り出されるには、言語や文章法の変化とともに、文学も大きな転換期を迎えていたため、上記の三つ目のケースに当てはまる。そのような時代において、西欧列強を中心とする諸外国の文学作品が次々に訳出され、翻訳ストラテジーも変化を遂げていった。当時の翻訳者は、起点言語の表現法などを目標言語である日本語に移入した結果、日本の創作文学や文章法などに影響を与えたのが一つの事例としてあげられる¹⁰。ただし、この

⁹ 原文は以下である。(1) When a young literature is being established and looks initially to more established literatures for ready-made models. (2) When a literature is peripheral or weak and it imports those literary types which it is lacking. (3) When there is a critical turning point in literary history at which established models are no longer considered sufficient, or when there is a vacuum in the literature of the country. Jeremy Munday, *Introducing Translation Studies* (Fourth edition) (Routledge, 2016) 172頁。本稿の日本語訳は、ジェレミー・マンディ著、鳥飼玖美子監訳『翻訳学入門』(みすず書房、2009) 169-170頁による。

理論は、絶対的な法則ではなく、概ねの傾向であると理解したほうがいい。

本稿では、1927年から2015年まで、ほぼ90年にわたる「蜘蛛の糸」の八つの中国語訳を考察対象として選択する。中国語訳が成立した社会・文化背景に大きな違いがあるため、その考察には、本理論が有効だと考える。

3. 「蜘蛛の糸」の八つの中国語訳の時代背景

まずは、両時期の時代背景について具体的に見ていくことにしたい。初めに、民国期の社会的背景を見てみよう。現代中国語の表現・文体の歴史において、最大といってよい変革期は、1905年から1930年代にかけての時期である¹⁰。特に五四新文化運動の前後は、文学史上においても重要な転換期である。五四新文化運動とその一環としての「白話文運動」は、「知識階級＝文語文、下層民＝白話文」という旧来の価値観を根本から突き崩そうとした。しかし、物心がついた時から旧教育を受け、文語文で文章を書いてきた知識人たちは、当初白話でどのように作品を書くのか困惑していた。新しい文学を創造することを呼びかける舞台であった『新青年』雑誌であっても、言文一致という旗を掲げた胡適の「文学改良芻議」と陳独秀の「文学革命論」は、依然として文語文で書かれたものであった。中国現代文学史上における最初の白話小説とされる「狂人日記」でさえも、文語文と白話文が混合した文体であった。また、1918年の創刊号から1926年7月の廃刊（総計9巻54号）に至るまで、『新青年』は魯迅の5つの革新的な短編小説以外、他に短編小説は発表

¹⁰ 水野の「近代日本の文学的多元システムと翻訳の位相—直訳の系譜」（『翻訳研究への招待』第1号、2007）3-43頁を参照。

¹¹ 朱一凡著『翻訳与現代漢語的変遷』（外語教学与研究出版社、2011）第1章を参照。

されなかった。中国の創作文学の実作がこのように乏しい状況であるならば、新しい国語、新しい文学を生み出すための模索と試行錯誤は、外国文学、そしてそこから生み出された翻訳文学に頼る他はなかったと言えるだろう。

そして、翻訳の面からみると、五四新文化運動以前の中国における外国文学の翻訳には特徴が二つあった。一つは、文語文を用いて翻訳すること。もう一つは、加筆・改ざんを任意に行った豪傑訳、訳述や翻案と称すべき「書き換え」が圧倒的に多いことだった。それが大きく変わったのが新文化五四運動の前後のことである。周作人が1918年4月に北京大学で行った「日本近三十年小説之發達」¹²という講演が、日本文学に対する再認識のきっかけとされている¹³。新文学をどのように進めるか、周作人は講演の中で、以下のように述べている。

新小説を提唱してからすでに20年あまりたつが、これといった業績はまだない。その原因とは何か。それは中国人は模倣をしない、模倣ができないという点にあると考えている。(中略) この弊害を改めようとすれば、積年の因習思想から抜け出し、真摯に先ず他国を模倣すべきである。そして、その模倣の過程から独自の文学へと脱皮することができる。日本は、我々のお手本であり、前述したように、中国の創作文学の実情は、日本で言えば明治十七、八年頃に相当する。したがって、目下の急務は、外国文学の翻訳と研究を提唱することである。¹⁴

¹² 後に1918年7月の『新青年』第5巻第1号に掲載。引用は41-42頁。なお、引用は合訂本によるものである。以下同様。

¹³ 王向遠著『日本文学漢訳史』（寧夏人民出版社、2007）40頁。

つまり、新小説を進めるためには、「真摯に他国を模倣すべき」「目下の急務は、外国文学の翻訳と研究である」と周作人は考えたのである。さらに、同年の11月、『新青年』第5巻第6号で、周作人は翻訳文学のあり方について、こうも述べている。

これからの翻訳は、原文を混ぜ入れるべきであり、中国語には他国の言語を受け入れる度量が必要である。奇怪な文字列を作らずに、原作の風格、感覚、論理をなるべく残すべきである。一字一字をたどりながら訳するのが最善の方法である。しかし、どうしようもない場合は、一文一文で翻訳してもよい。中国語でも外国語でもないという文になっても構わない。上辺だけ中国語化する必要はないのである。¹⁵

周作人の考えは、外国文学の真似をすること、原作の気風を採り入れること、逐語訳をすること、外国語の表現をそのまま取り入れること、などに集約される。当時、すでに中国文学界の重鎮となっていた周作人の提案は、中国における日本文学の翻訳方法について大きな影響力を持ったと言われている¹⁶。

前述したように、翻訳文学が主要な位置を占める場合、翻訳者は目標言語の既存の言語規範に従わない。1920年、魯迅訳『ある青年の夢』は、

¹⁴ 原文は以下である。筆者日本語訳。以下、本稿の中国語資料も特に明記しない限りすべて同様。「中國講新小説也二十多年了，算起來卻毫無成績，這是什麼理由呢？據我說來，就只在中國人不肯模倣不會模倣。（中略）我們想要救這弊病，須得擺脫歷史的因襲思想，真心的先去模倣別人。隨後自能從模倣中，蛻化出獨特的文學來，日本就是個榜樣。照上文所說，中國現時小說情形，仿佛明治十七八年時的樣子，所以目下切要辦法，也便是提倡翻譯及研究外國著作。」

¹⁵ 『新青年』第5巻第6号、615頁。原文は以下である。「我以為此後譯本，仍當雜入原文，要使中國文中有容得別國文的度量，不必多造怪字，又當竭力保存原作的風氣習慣，語言條理，最好是逐字譯，不得已也應逐句譯，寧可中不像中，西不像西，不必改頭換面。」

¹⁶ 王向遠前掲書40頁。

周作人が提唱したようなできる限り原文のまま訳したものである。それ以前の翻案的翻訳を是正する方策が見出せず、あるいは白話文でどのように表現するか、まだ模索段階にあった段階では、中国語として違和感のある直訳も数多く出現した。たとえば、『ある青年の夢』中の「人間はまだ人類的にまで成長し切らないうち、戦争がやまないものだと思います」を「我想倘若人間還沒生長到人類的，戰爭是不會停止」¹⁷と訳すとといった難解な中国語訳が散見されるが、いささかの違和感があるとも、くぐり抜けるべき必然的な通過点だったといえよう。

要するに、この時期は、Even-Zoharの多元システム理論でいう翻訳文学が主要な位置を占めるケースの「(3) 文学史の重要な転換期にあって、既存のモデルがもはや十分とはみなされない場合、あるいは一国の文学の真空状態にあるとき」に当てはまるだろう。つまり、1920-1930年代は、翻訳文学が主要な位置を占め得る時期だったのである。

一方、1949年に新中国が成立した後、社会は大きな転換期を迎えており、翻訳界の環境も一変した。社会経済体制の変化に伴い、出版業界は国がまとめて指導・手配し、国の計画に従って進められるようになった。ことばの表現や文章法においても、国による規範化活動が一気に進んだ。たとえば、1955年10月26日付の『人民日報』は「為促進漢字改革，推廣普通話，實現漢語規範化而努力」（漢字改革の促進のために、普通話を普及させ、中国語の規範化の実現に取り組もう）という社説を發表し、中国語の純潔さと健全さを保つ重要性和言語の規範化を提唱している。

中国語は世界で最も發達、最も重要な言語の一つである。また、その符号である漢字は、歴史が最も長い、影響が最も大きい文字の

¹⁷ 『新青年』第7卷2号、99頁。

一つである。(中略) すべての中国人の話し言葉と書き言葉、とりわけ、言語の使用における模範を示す役割を担う人は、中国語の純潔さと健全さに留意すべきである。まず手始めは、すべての作品、特に文学作品である。なぜなら、言語の規範は、主に作品を介して広がるからである。¹⁸

こうした中、一部の翻訳家や作家も新中国時代の言語規範により、民国期の旧訳や旧作の修正に着手することとなる。たとえば傅雷訳『ゴリオ爺さん』の1946年版から1964年版¹⁹への改訳、巴金著『家』²⁰の1931年版から1957年版への改訂は、その実例といえる。

4. 訳例の比較検討

以上、「蜘蛛の糸」が翻訳された両時代の社会背景を簡単に説明した。この節では、芥川龍之介「蜘蛛の糸」の八つの中国語訳本を具体的に考察してみたい。前述したように、民国期、特に1930年代までは白話文が創出されつつあった時期であるため、現代中国語の言語規範は、まだ完全に定着していなかった。その一方、1980年代以降は、すでに現代中国語の規範化が固まっていた時期である。このように異なる社会背景のもの

¹⁸ 引用は『為促進漢字改革，推廣普通話，實現漢語規範化而努力』（広東人民出版社、1956）による。原文は以下である。「漢語は世界上最發達最重要的語言之一，漢語の書寫符號漢字，是歷史最長久，影響最深廣的文字之一。（中略）要促使每一個說話和寫文章的人，特別是在語言使用上有示範作用的人，注意語言的純潔與健康。這首先是一切作品，特別重要的是文學作品，因為語言的規範主要是通過作品傳播開來的。」

¹⁹ 金聖華「傅訳高老頭の藝術」金聖華編『傅雷與他的世界』（三聯書店、1996）170-194頁を参照。例をあげると、傅雷訳『ゴリオ爺さん』（1946年版）「巴黎的愛情，跟旁的愛情沒有一些相同。特別在巴黎，愛情是喜歡吹捧的，無恥的，浪費的，江湖派的，奢華的。」（1964年版）「巴黎的愛情和旁的愛情沒有一點兒相同。巴黎的愛情尤其需要吹捧，無耻，浪费，哄騙，摆闊」がある。

²⁰ 朱一凡著『翻譯與現代漢語的變遷』（外語教學與研究出版社、2011）122頁を参照。例をあげると巴金著『家』（1931年版）「我夢見我跑到深山裏，被一群豺狼追趕着，看看要被他們趕上了。」（1957年版）「我夢見我在深山里，一群豺狼在后面追趕我，看看就要追上了」がある。

とで、翻訳者はそれぞれどのような翻訳ストラテジーを採っていたのかを、訳例を比較検証することで考察したい。下記の引用書誌情報に示すように、本稿で分析対象とする中国語訳テキスト（以下：CT=Chinese text）は、民国期の四つの訳本をそれぞれCT1-CT4と表記する。人民共和国期の訳本は、1980年代からつい最近の節目となる翻訳までを選択し、CT5-CT8と表記する。なお、区別を明瞭にするため、民国期と人民共和国期の訳例の間は、「※※※」で分割した。

引用書誌情報

表記	タイトル	翻訳者	書籍名	初出年度	出版社
CT1	蜘蛛之絲	黎烈文	『文学周報』278期 ²¹	1927.08	開明書店
CT2	蛛絲	湯鶴逸	『芥川龍之介小説集』	1928.07 ²²	北平文化学社
CT3	蜘蛛的絲	徐羽氷	『大众文藝』第1巻第5期 ²³	1929.01	上海現代書局
CT4	蜘蛛之絲	孫百剛	『一般』第9巻第2期 ²⁴	1929.10	一般編輯委員会
CT5	蜘蛛絲	吳樹文 ²⁵	『芥川龍之介小説選』	1981	人民文学出版社
CT6	蜘蛛之絲	高慧勤 ²⁶	『芥川龍之介全集①』	2005	山東文芸出版社
CT7	蛛絲	林少華 ²⁷	『羅生門』	2008	上海訳文出版社
CT8	蜘蛛之絲	趙玉皎 ²⁸	『羅生門』	2015	云南人民出版社

²¹ 引用は黎烈文訳『河童』（商務印書館、1928）単行本の「蜘蛛之絲」による。112-121頁。

²² 湯鶴逸訳「蜘蛛之絲」の訳者注では、「一九二四、四一〇、譯於姑蘇旅次」と書いてある。しかし、なぜその時点で発表しなかったのかは、現在の資料では究明できない。

²³ 引用は『大众文藝』第1巻合訂本による。

²⁴ 引用は『一般』第9巻合訂本による。

²⁵ 吳訳「蜘蛛の糸」は、人民共和国期において最初の中訳本である。

²⁶ 日本文学の翻訳において著名の翻訳家。なお、筆者の調査では、高慧勤訳芥川文学は、中国で重版される最も多い訳本である。

²⁷ 日本文学の翻訳において著名の翻訳家。元中国海洋大学教授。

²⁸ 天津商業大学講師。2019年10月現在では、趙訳『羅生門』は3回ほど重版されており、非常に評判のいい訳本と見られる。

また、CTの分析基準については、日中翻訳の実践と日英翻訳の分析項目をもとに、次の4点の基準を暫定的に設ける。(1)文化・言語の不一致²⁹、(2)量詞(助数詞)³⁰、(3)連体修飾語、(4)修辭的加飾³¹。紙面の都合上、具体的にそれぞれ2つずつ訳例を取り上げながら、考察する。以下、訳例では頁数のみ示す。なお、各訳例の中の下線や囲み線などは、すべて筆者による。

4.1 言語の不一致について

<訳例1-1>³²

(ST) ある日の事でございます。御釈迦様は極樂の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしゃいました。

(CT1) 某天，釋迦菩薩獨自在極樂的蓮池邊徘徊的走着。(112)

(CT2) 一天，釋迦獨自一人在極樂世界的蓮池邊緩步。(132)

(CT3) 有這麼一天的事情，釋迦自己搖搖蕩蕩的走到極樂的蓮池之畔了。
(837)

(CT4) 某日，釋迦牟尼佛獨自在極樂世界蓮池邊上散步。(229)

※※※

(CT5) 有一天，釋迦牟尼在西天極樂淨土的荷花池畔獨自溜達。(102)

(CT6) 一天，佛世尊獨自在極樂淨土的寶蓮池畔閑步。(325)

(CT7) 一日，釋迦佛祖围着極樂蓮池獨自踱步。(70)

(CT8) 某一日，釋迦佛祖在極樂淨土的蓮池畔悠然閑步。(121)

²⁹ 文化・言語の不一致には、「文化差のある言葉」(文化の不一致)や言葉使い、文法(言語の不一致)など含まれる。「蜘蛛の糸」は、「言語の不一致」のみ取り上げたい。

³⁰ すべての作品の分析基準に適應できるとは限らない。

³¹ 筆者の造語。説明の便宜上使用したものである。つまり、中国語の審美規範により訳文を修辭的にリライトすること。

³² 原文(以下:ST=Source Text)は『芥川龍之介全集2』(筑摩書房、1986)による。

STの「お一さま」は、尊敬の意を表す日本語の敬称である。中国語には「敬辞」という尊敬の意を表す語彙レベルのものはあるが、日本語のような「敬語システム」が存在しない。それをどのように埋めるのかは、翻訳者の手法が如実に表れるものである。民国期のCT1は「菩薩」、CT4「佛」³³を加筆しているのに対し、CT2、CT3はSTのままである。一方、人民共和国期のCT7とCT8は「佛祖」を加筆し、CT5は「释迦牟尼」、CT6「佛世尊」に変えている。いずれも文法の次元から語彙の次元へと転換しているのである。

< 訳例1-2 >

(ST) 御釈迦様はその蜘蛛の糸をそっと御手に御取りになって、玉のような白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下しなさいました。

(CT1) 釋迦菩薩便輕輕的走去一下，把這蜘蛛絲拿到手裏，並且把牠從那玉一樣的白蓮中間，筆直的投向那遙遠的底下去了。(114)

(CT2) 釋迦輕輕把那個絲取到手中，從像玉石的白蓮之間，一直把牠擲到遙遙在下的地獄。(133)

(CT3) 釋迦靜寂的取了蜘蛛的絲，於是從玉一般的白蓮間，把絲一直的放到極下的地獄之底了。(838)

(CT4) 釋迦隨手悠悠地取了這蜘蛛的絲，就將這絲從玉一般的白蓮之間，垂向十八層地獄。(230)

※※※

³³ CT4孫百剛訳「蜘蛛之絲」では、冒頭の「御釈迦様」が「釋迦牟尼佛」と訳されているが、後文はすべて「釋迦」である。

- (CT5) 释迦牟尼轻轻地勾起这丝银缕，使它从玉一般晶莹的白莲之间一直垂向深邃莫测的地狱深处。(103)
- (CT6) 世尊轻轻取来一缕蛛丝，从莹洁如玉的白莲间，径直垂向杳渺幽邃的地狱底层。(326)
- (CT7) 佛祖轻轻提起那条蛛丝，从玉一般晶莹的白莲之间笔直地遥遥垂向下面的地面。(71)
- (CT8) 佛祖轻轻拈过一缕蛛丝，从皎洁如玉的白莲间笔直放下，直垂向杳渺幽深的地狱最底层。(122)

STは、「お～、ご～」による敬語である。しかし、八つの中国語訳例では、いずれもそれを表現しきれない。この点はおそらく、時代との関係なく、言語の不一致のために生じる「翻訳の不可能性」というべきものである。つまり、日本語の「ごぞいます調」で書かれた作品である「蜘蛛の糸」に対し、中国語には相当する「敬語システム」が存在しない。したがって、こうした言語的な相違は、翻訳では超えられない壁と言えるだろう。

また、敬語の訳例について、これをどう取り扱うかは、以下、中国の日中翻訳教材『日漢翻訳教程』に掲げられた一節が参考になろう³⁴。

【資料】

あなたからの御返事をお待ちしておりますが、まだ参りません。私は心配になります。怒っていらっしゃるのですが、憐れと思って御返事ください。私は巴里に行きとう御座います。一目あなたに御目にかかりたい。そうすれば死んでもいいと思います。武子さまはこのく

³⁴ 高寧主編『日漢翻訳教程』（上海外語教育出版社、2009）401頁。

れにおたちになります。羨ましく思います。御返事を、御返事をお待ちしております。

訳例① 我期待着你的回信，但还没有来。我担心你是不是生气了。请可怜我，给我回信吧！我打算去巴黎，想见你一面，那样就是死也甘心。武子准备年底动身，我多羡慕她呀！我期待和盼望着你的来信。

訳例② 我恭候着您的还翰。它却姗姗来迟。我颇为担心，害怕您赫然而怒。请可怜小女赐函一封。我将远去巴黎。只为一览风采，便死而无憾。武子小姐年底成行，我不胜羡慕。翘首敬候裁答。

訳例①は、中国語の日常会話文体で翻訳しているため、原文の敬意表現を表すことができていない。それに対し、訳例②は、敬意は表せるが、中国語としては、非常に格調が高くなりすぎる。かなりの高級知識人でないと、このような文章が書けない。原文の話し手はしかし、ごく普通の日本人女性であり、その敬語も当時誰でも使える程度の敬語でもあり、特にレベルが高いものではない。訳例②の中国語では、中国の知識人文人階層によって書かれたものかと誤解を招きやすい。つまり、日本語と中国語で「敬語システム」を持つか持たないかの言語の不一致から、こうした翻訳のジレンマが生じるわけである。

4.2 量詞について

量詞は事物を数えることばであって、事物ごとに対応する語が用いられる。日本語では助数詞ともいわれる。現在の中国語では「蜘蛛」などを数えるとき、「只」を用いるのが一般的である。次にあげる訳例では、民国期の言語規範がまだ定着していないことが窺える。

<訳例2-1>

(ST) ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が「一匹」、路ばたを這って行くのが見えました。

(CT1) 某天，這個人在深邃的樹林中，看到「一匹」小小的蜘蛛在路旁爬行。

(113)

(CT2) 就是某時，他路過一處森林，看見「一個」小蜘蛛，緣行道旁。(132)

(CT3) 一天，他經過深林的裏邊，看見了「一個」小蜘蛛爬過路邊。(838)

(CT4) 有一次，他經過深林之中，看見一匹小小的蜘蛛，在路旁爬着。

(229)

※※※

(CT5) 有一次韃陀多从密林中通过，他看到「一只」小小的蜘蛛在路旁爬行。

(102)

(CT6) 话说大盗韃陀多有一回走在密林中，见到路旁爬行的「一只」小蜘蛛，

(……) ³⁵ (325)

(CT7) 一次从深山密林中穿行时，看到「一只」小蜘蛛在路旁爬行。(70)

(CT8) 原来有一次在密林中，韃陀多看到「一只」小小的蜘蛛在路边爬，

(121)

民国期の四つの訳例は、1928年から1929年にかけて発表されたものであり、時差のない訳文にも関わらず、二人の翻訳者が原文のまま「一匹」を取っているのに対し、二人の翻訳者が「一個」で訳しているという量詞の使い方の相違が見られる。実際に古代中国語でも現代中国語でも、「匹」とは馬やロバ、あるいは反物を数える量詞であり、猫、犬、

³⁵ 例で使用した(……)は、(前略)、(中略)、(後略)を意味する。以下同様。

鼠、そして昆虫などを数えることはまずない。また、昆虫を数える量詞について「頭」も用いる。たとえば、王力著『漢語語法史』³⁶では、以下の例を挙げている。

口中飯盡成大蜂數百頭。 (《神仙傳》)

夢見青蠅數十頭來在鼻上。 (《三國誌・魏書》)

この「匹」をめぐる翻訳は、中国語の言語規範から逸脱した異化的翻訳である。民国期の翻訳者たちは、このような翻訳ストラテジーによって、積極的に日本語の表現を移入したのだと考えられる。別の面から見ると、当時白話文の言語規範がまだ定着していなかった点も窺える。また、同時期の翻訳でも、同じような現象が散見される。たとえば、「只在朱漆剥落的大的圓柱上，停着一匹的蟋蟀。」(魯迅訳「羅生門」、『芥川龍之介集』14頁、開明書店、1927)、「廚房角落裏的鮑殼前面，有一匹大的牡金花貓沈靜的蹲在香盒的上面。」(謝六逸訳「阿富的貞操」、『小説月報』第18巻第9号80頁、1927)などの例である。つまり、「蟋蟀」や「猫」を、本来適用しない量詞である「匹」で数えている。その一方、人民共和国期の訳文は、1980年代から2015年のものであり、30数年を隔てるが、いずれも「一只」と訳している。ここには、現代中国語の規範化がすでに定着した一端が示されているといえる。

4.3 連体修飾語について

この点については、すでに前稿の「芥川龍之介「羅生門」と「鼻」の中国語訳について」³⁷で指摘したように、現在の中国語では文法上、長い連体修飾語を好まないのが一般的である。それゆえに、多くの中国

³⁶ 王力『漢語語法史』(中華書局、2014) 33頁。

³⁷ 『芥川龍之介「羅生門」と「鼻」の中国語訳について—魯迅訳と1970年代以降の翻訳成果の懸隔—』『文教大学大学院言語文化研究科紀要』第五号を参照。

の翻訳教科書では、日本語の長い連体修飾語を中国語訳する際、文を区切って翻訳したほうがよいと教えている。連体修飾語をめぐる訳出は、両時期の翻訳方法の相違を示す典型的な例と言ってよい。

<訳例3-1>

(ST) この犍陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、(……)

(CT1) 這個叫做犍陀多的人是一個曾經殺人放火做過種種惡事的大強盜。

(113)

(CT2) 犍陀多這個男子原是一個殺人放火做了種種惡事的大強盜。

(132)

(CT3) 犍陀多是個殺人放火做種種惡事的大賊。(838)

(CT4) 這位犍陀多是一個殺人放火做諸般惡事的大強盜。(230)

※※※

(CT5) 这个叫犍陀多的男子，是一个杀人放火、无恶不作的大強盜。

(102)

(CT6) 这犍陀多虽说是个杀人放火，无恶不作的大盜，(……) (317)

(CT7) 犍陀多这个人又是杀人又是烧房子干了许多多坏事，是个大盜。

(70)

(CT8) 犍陀多是位大強盜，杀人放火，无恶不作。(120)

この例では、CT1－CT4の民国期の訳文は、外国語を模倣するために、いずれも原文の文構造を保ち、「連体修飾語－被修飾語」の形式を維持して訳している。こういう翻訳手法は、魯迅訳「鼻」「羅生門」で顕著であるが、1980年代以降の訳文のCT5－CT7は、原文と同じ語順と見ら

れるが、読点を付加して原文を複文にし、訳文を読みやすくする処理を施している。また、人民共和国期の訳文のCT5、CT6、CT8では「殺人放火、无恶不作」という常套句を嵌め込むことで、文を簡潔化する同化的な工夫も見られる。

<訳例3-2>

(ST) こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しょに、浮いたり沈んだりしていた **犍陀多** でございます。

(CT1) 這邊是地獄的底的血池。 **犍陀多** 在和別的罪人一塊兒沈浮着。
(115)

(CT2) 那裏，正是地獄低下的血河池中， 和其他罪人在一塊兒沈浮着的 **犍陀多**。 (133)

(CT3) 此處是地獄底下的血池， 和其他罪人在一起沈着浮着的 **犍陀多** 的所在。 (838)

(CT4) 這是在十八層地獄血河池中 和其他罪人一起沈浮着的 **犍陀多**。
(230)

※※※

(CT5) 地獄底层有一个血池， **犍陀多** 正和其他罪人在血池里时沉时浮。
(103)

(CT6) 这边 **犍陀多** 正和其他罪人，在地獄底层的血池里载沉载浮。 (318)

(CT7) 这里是地獄底层的血池， **犍陀多** 和其他罪人一起忽而浮起忽而沉下。 (71)

(CT8) 地獄底的血池中， **犍陀多** 正与其他罪人一道载沉载浮。 (122)

<訳例3-2>では、CT1以外、CT2-CT4のいずれもSTの文構造に準

扱った逐語訳であって、語順の調整は見られない。それに対し、人民共和国期の訳文は、被修飾語を修飾語の前に移し、現代中国語の一般的な規範に従い、これによって違和感のある文構造を避ける傾向が見られる。

4.4 修辭的加飾

修辭的加飾について、まず一事例をあげたい。中国の翻訳史をみると、訳経僧として知られる釈道安(312-385)は、仏典の漢訳を行ううえで規範となる「五失本」³⁸(本=本意、五失本=五つの歪み)を主張した。そこで釈道安は、「胡経はやさしい文で書かれたものだが、漢文は、奥深い文学的表現を重んじる。そうしないと、大衆が受け入れにくくなる。それは、二つ目の失本」であるとの説を示している。つまり、中国人は、胡経(サンスクリット語)より、美しく飾りたてた言葉や文句を好む傾向があり、中国人の読者に翻訳作品を受け入れさせるために、修辭的にはある程度の加筆が必要である、というのだ。これは、典型的な同化的翻訳ストラテジーといえるが、実際には、日中翻訳の場合にも、同じような事例がある。

³⁸ 「五失本」(『大藏經』第42頁、頻伽精舍校刊、1913)について、具体的な内容は以下の通りである。筆者日本語訳。

譯胡為秦，有五失本也。一者，胡語盡倒而使從秦，一失本也。二者，胡經尚質，秦人好文，傳可眾心，非文不可，二失本也。三者，胡語委悉，至於詠嘆，叮嚀反復，或三或四，不嫌其煩，而今裁斥，三失本也。四者，胡有義說，正似亂辭，尋說向語，文無以異，或千，五百，刈而不存，四失本也。五者，事已全成，將更傍及，反騰前辭，已乃後說，而悉除此，五失本也。

つまり、胡(サンスクリット語)から秦(漢語、中国語)に翻訳する過程において、「五失本」が現れた。①「胡語から秦に訳すると、語順を調整しなければならない。それは、一つ目の失本」、②「胡経はやさしい文で書かれたものだが、漢文は、奥深い文学的表現を重んじる。そうしないと、大衆が受け入れにくくなる。それは、二つ目の失本」、③「胡語は必要以上に詳しすぎるから、それを簡潔にするのは、三つ目の失本」、④「胡語は本文のあと、総括がある。しかし、本文と総括はほぼ同じ。漢訳する際、それを削除するのは、四つ目の失本」⑤「胡語は前述の繰り返しが多い。漢訳する際、それを削除するのは、五つ目の失本。」

<訳例4-1>

(ST) 池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂いが、絶間なくあたりへ溢れて居ります。

(CT1) 池中開着的蓮花，都像玉一般的白，一種不能言說的妙香，正從那當中的金色花蕊向四周不絕的散溢。(111)

(CT2) 池中的蓮花，正開得純白如玉，花中的金色蕊，發散着一種難以言喻的香味，噴溢到四周。(132)

(CT3) 池中開着的蓮花，都像玉一般的的潔白，從當中金色的蕊裏，滿散著一種說不出的香味。(837)

(CT4) 池中開着的蓮花，多像玉一般的白，從當中金色的花蕊，不斷地向四周散發不可名言的芳香。(229)

※※※

(CT5) 池中荷花盛开，雪肤冰肌的花朵中，花蕊娇黄点点。粉蕊浮起一种奇香瑞气，它一阵阵暗渡池面，周围溢满了馨香。(102)

(CT6) 池中莲花盛开，朵朵都晶如白玉。花心之中金蕊送香，其香胜妙殊绝，普薰十方。(325)

(CT7) 池中开的莲花无不洁白如玉，正中间金色的花蕊不断向四周洋溢无可言喻的芳香。(70)

(CT8) 池中绽放的莲花皆是莹如白玉，花朵中央金色的花蕊涵芬吐芳，薰香绵绵四溢，清妙难言。(121)

単に忠実度という視点から見ると、民国期の訳文は1980年代以降のもの比べて忠実度が高く、加筆や語順の調整など少ない。その一方、1980年代以降の訳文は文語文と白話が混ざったものが多い。この現象は

翻訳の文体が変わったことを示す。つまり、人民共和国期の翻訳者は白話文と文語文の間に截然とした境界は立てず、白話文だけで表現するのではなく両者を混ぜて使う傾向が強まってきたということだ。

そのほか、作品に対する翻訳者の手法も文字上の忠実度だけに限らなくなった。たとえば、1981年のCT5呉樹文訳では、「池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂いが、絶間なくあたりへ溢れて居ります」に対して、「池中荷花盛开，雪肤冰肌的花朵中，花蕊娇黄点点。粉蕊浮起一种奇香瑞气，它一阵阵暗渡池面，周围溢满了馨香」（池の中には蓮が咲いていて、雪と氷のように白い花の中には、黄色く華奢な蕊が点在している。蕊からは奇妙な香りが漂い、こっそりと池の表面に渡り、周りは香りで満ち溢れている）と、「玉のようにまっ白」を「雪膚氷肌（雪と氷のように白い）」と訳している。「雪膚氷肌」は元々、女性の肌が白いことを形容するための言葉である。「何とも云えない好い匂い」を四字格の中国語「奇香瑞氣」と訳し、「絶間なくあたりへ溢れて居ります」を「它一阵阵暗渡池面，周围溢满了馨香」（こっそりと池の表面に渡り、周りは香りで満ち溢れている）と訳し、「こっそりと池の表面に渡り」というところは翻訳者の想像が加味されたものであると言える。

CT6の高慧勤が訳した「池中蓮花盛开，朵朵都晶如白玉。花心之中金蕊送香，其香胜妙殊绝，普薰十方」（池の蓮は咲き、皆白玉のようにきらめいている。花の心にある金の蕊は香りを送りだし、その香りは奇妙で極めて特異で、十方に溢れている）も原文に対して修飾要素の多いリライトを行っているが、これは中国翻訳教材界から高い評価を受けており、「无辞以赞」（讚える言葉が見つからない）ほどと言われている³⁹。

³⁹ 高寧主編『日漢翻訳教程』（上海外語教育出版社、2009）26頁を参照。

CT7の林少華訳は、比較的原文の構造に近いが、CT8の趙玉皎訳も、CT5とCT6に同じような修辭的加飾が見られる。

<訳例4-2>

(ST) この極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

(CT1) 這極樂蓮池的下面，正當着地獄之底。所以水晶似的水透明的連貫着。三途河和針山的景色，像從眼鏡中看去壹樣，清清楚楚的見着。(113)

(CT2) 這個極樂世界的蓮池底下，恰當着地獄，透過像水晶的睡眠，那奈何和刀山的景色，好像瞧發光鏡一樣，都可很了然的看見。(132)

(CT3) 這極樂蓮池的下面，正因為當着地獄之底。透徹著水晶般的水。‘三途河’‘針山’的風景，清清楚楚的可以看見。(837)

(CT4) 極樂世界蓮池的下方，恰好是十八層地獄，透過水晶一般的水，下面三叉河尖刀山的景色，像看西洋鏡壹樣極明白得看得見。(229)

※※※

(CT5) 极乐净土的这个荷花池恰好下承十八层地狱，所以透过水晶般清澈的池水，地狱中的三途道、奈河和刀山剑树的光景，仿佛看西洋镜箱似的，一览无遗。(102)

(CT6) 极乐莲池之下，正是十八地狱的最底层。透过澄清晶莹的池水，宛如戴上透视镜一般，把三恶道上之冥河与刀山剑树的诸般景象，尽收眼底。(325)

- (CT7) 这极乐莲池的下面正是地狱的底层，透过水晶般的水，可以清楚地看见三途河和刀山景象，恰如窥看透视镜一般。(70)
- (CT8) 这座极乐净土的莲池下方，恰巧是地狱的最底层，透过水晶般清澈的池水，三途冥河与针山上的情景历历在目，仿佛窥看透视镜一般。(121)

この例でも、1980年代以降の訳文は文学的な修飾を加えるのを好む傾向が見られる。たとえば、CT5は原文の「三途の河」を「三途道」と「奈河」と2つの語彙に分けて、翻訳し、「針の山」を「刀山剑树」と中国語化した対句的表現とした。1981年のCT5呉樹文の翻訳は新中国建国後初の「蜘蛛の糸」の訳本であるが、その翻訳ストラテジーは明らかに民国期のもとは違い、語順の調整だけではなく、修辭的加飾をも施している。CT6では、「把三恶道上之冥河与刀山剑树的诸般景象」（三悪道の冥河と刀山剑树など色々な光景）と訳している。すなわち二人の翻訳者は、中国人読者に馴染みのある言葉や分割して対句的表現をとる言語習慣を用いて、原文に対して相当程度の加飾を施しているのである。

5. まとめ

1918年、周作人が逐語訳を提唱したのは「積年の因習思想から抜け出し、真摯に先ず他国を模倣すべき」と考えたためである。1920年代末に、魯迅は、「中国語の文、言葉などは、文法的にはあまりにも精密ではない」、これを改善しようとするれば、「継続的に苦勞を重ね、異様な文法を取り入れるしかないと考えている」⁴⁰という意図に基づき、一字一句の逐語訳を提唱したのである。これはすべて、民国期の1920年代は翻訳文

⁴⁰ 魯迅の翻訳論については、前稿3. 2節を参照。

学が、Even-Zoharの多元システム理論でいうところの主要な位置を占めていたことの証といえる。

また、八つの訳本を読み比べればわかるように、民国期は翻訳文学が主要な位置を占めるため、一字一句を逐語的に翻訳するものが主流で、起点言語に対して翻訳者が加筆（加訳）や語順の調整を行う事例はきわめて少ない。つまり、どうしても必要な語順の調整以外は、すべてできるかぎり起点言語との一致性を保ち、文の構造も起点言語に寄り添っている。民国期の1927-1929年の四つの「蜘蛛の糸」の中国語訳は、魯迅が1921年に訳した「鼻」、「羅生門」とほぼ同じ翻訳ストラテジーを使っていると見て取れる。

そして、時代の変化に伴い、現在の翻訳者には中国語が「精密ではない」と思う人は、少なくとも論文や刊行物では見られない。これと対照的に、中国語の言語習慣によって訳文を修飾するべきだと見る翻訳者が多くなっている。現在の著名な翻訳家、林少華の翻訳論からもこのような考え方が窺える⁴¹。

美しすぎる訳文も人に疑いを持たせてしまう。例えば、私が村上春樹という日本人作家の文章を美化しているのではないかと善意で聞いてくる読者がいた。しばらく前、「上海電視」のインタビューでも聞かれたが、私はこう答えた。美化もしているし、そうでも

41 林少華のエッセイ集『落花之美』（青島出版社、2013）138-139頁。原文は以下である。「译得过于美妙也会让人生疑，如有的读者就善意地问我是不是美化了那个名叫村上春树的日本人。日前《上海电视》采访又问到这点，我是这样回答的：“既美化了又没有美化。说美化了，是因为汉语本来就是世界上最富于装饰美的语种，加之我本身就是搞中日古诗比较的，难免多用几个文言词儿。说没有美化，是因为日本文学如日本料理，以淡为主，以淡为美。问题是如果同样译的那么淡，中国人就未必觉得美了。这就好比上海菜和山东菜，上海人觉得咸淡正好的菜，山东人往往觉得淡。要让山东人觉得正好，就要多放几克盐进去。而我为了缩短日本人和中国的审美距离，有时就在允许的范围内微调一下，即多放几克盐。在这个意义上，就不是美化，而是一种信，一种忠实，即审美忠实。这在范围翻译上不仅是允许的，也是必需的。」

ない。美化したというのは、中国語はもともとこの世で最も美的装飾に富んでいる言葉である。そもそも私は、中日古詩の比較研究を行っているし、若干の文語文を使ってしまうのも仕方がない事であるからだ。美化していないというのは、日本文学は日本料理のように、淡いものを主流とし、淡いものを美としているからである。ただ、日本文学と同じように、淡く翻訳すると、中国人にとっては美しくないと感じられてしまうかも知れない。これは上海料理と山東料理のようなもので、上海人にとって味付けがちょうど良い物は、山東人にとっては味が薄い。山東人にちょうど良いと思わせたいのであれば、もう数グラム塩を足さなければならない。日本人と中国人の審美的差異を縮めるため、私は時として許された範囲内で微調整を施している、すなわち、その数グラムの塩を足しているのである。この意味では、それは美化ではなく、信であり、忠実であり、審美的な面という忠実である。翻訳においてこれは許されるものであり、なおかつ必要なものでもある。」

林少華は、日本文学は「淡いもの」を美としているので、同じく「淡く翻訳する」（そのまま直訳する）と中国人にとって美しくないと感じられるかもしれないという。このため微調整すべきであると主張する。これを、「審美的な忠実」という概念で表している。1980年代以降、芥川文学作品を訳す他の翻訳者らは、「審美的な忠実」という概念を明確に提示してはいないが、具体的な訳例から分かるように、これらの翻訳者もみな原文の表現や文の形式にとらわれず、同化的翻訳ストラテジーによって、相当程度の加筆やリライトを行っている。つまり、現代中国語による文章表現や文体がすでに形成された時期では、翻訳者たちは、目標言語の規範に従い、同化的翻訳ストラテジーを採るのが主流となっ

たのである。

このような同一作品の複数の翻訳を対照してみると、翻訳者の翻訳ストラテジーは、時代と大きな関係があり、変化し続けていることが明らかだといえる。多元システム理論が挙げる翻訳文学が主要な位置を占める際の三つの代表的なケースが、ここでも十分立証されるといえるだろう。民国期から人民共和国期にかけての中国語表現と中国文学の文章形式の定着が、多元システムの表れとして芥川文学の翻訳の文体、表出手法の変遷の中に示されているのである。

参考文献

1. 日本語文献

- ①芥川龍之介著『芥川龍之介全集』（筑摩書房、1986）
- ②藤濤文子著『翻訳行為と異文化間コミュニケーションー機能主義的翻訳理論の諸相』（松籟社、2007）
- ③ジェレミー・マンディ著、鳥飼玖美子監訳『翻訳学入門』（みすず書房、2009）
- ④齊藤美野著『近代日本の翻訳文化と日本語』（ミネルヴァ書房、2012）
- ⑤鳥飼玖美子編著『よくわかる通訳翻訳学』（ミネルヴァ書房、2013）
- ⑥河野至恩、村井則子編『日本文学の翻訳と流通』（勉誠出版、2018）

2. 日本語論文

- ①尹永『「春琴抄」の二つの中国語訳に見られる翻訳方略と規範についてー記述的翻訳研究のケース・スタディーとして』（『通訳翻訳研究』9号、2009、195-209頁）
- ②金炫珂『日韓翻訳に見られる翻訳規範の変化と異文化コミュニケーションー川端康成『雪国』の翻訳を題材に一』（東北大学博士論文、

2011)

- ③王唯斯『芥川龍之介「羅生門」と「鼻」の中国語訳について—魯迅訳と1970年代以降の翻訳成果の懸隔—』（『文教大学大学院言語文化研究科紀要』5号、2019、59-88頁）
- ④水野的「近代日本の文学的多元システムと翻訳の位相：直訳の系譜」（『翻訳研究への招待』1号、2007）

3. 中国語文献

- ①『大藏経』第42頁「出三藏記集序卷第八 摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序」（頻伽精舎校刊、1913）
- ②『為促進漢字改革，推廣普通話，實現漢語規範化而努力』（広東人民出版社、1956）
- ③金聖華編『傅雷與他的世界』（三聯書店、1996）
- ④王向遠、陳言著『二十世紀中国文学翻譯之爭』（百花文芸出版社、2006）
- ⑤王向遠著『日本文学漢訳史』（寧夏人民出版社、2007）
- ⑥高寧主編『日漢翻譯教程』（上海外語教育出版社、2009）
- ⑦朱一凡著『翻譯与現代漢語的變遷』（外語教学与研究出版社、2011）
- ⑧林少華著『落花之美』（青島出版社、2013）
- ⑨王力著『漢語語法史』（中華書局、2014）

4. 中国語訳本

- ①『新青年』第5卷第1号（1918）、第5卷第6号（1918）、第7卷2号（1920）
- ②『小説月報』第18卷第9号（1927）
- ③魯迅等訳『芥川龍之介集』（開明書店、1927）

- ④湯鶴逸訳『芥川龙之介小説集』（北平文化学社、1928）
- ⑤黎烈文訳『河童』（商務印書館、1928）
- ⑥『大衆文藝』第1巻第5期（上海現代書局、1929）
- ⑦『一般』第9巻第2期（一般編輯委員会、1929）
- ⑧文傑若、呉樹文、呂元明、文学樸『芥川龍之介小説選』（人民文学出版社、1981）
- ⑨魏大海主編『芥川龍之介全集』（山東文芸出版社、2005）
- ⑩林少華訳『羅生門』（上海訳文出版社、2008）
- ⑪趙玉皎訳『羅生門—芥川龍之介短篇小説選』（云南人民出版社、2015）

5. 英語文献

Jeremy Munday. *Introducing Translation Studies* (4ed) (Routledge、2016)